

『才能』 作：ポチ子

『才能』 作：ポチ子

その作品が、

いかに素晴らしいか、

説明することができれば、

その才能が自分のものになったような気がした。

ただ讚えるだけで、

自分は何もしていないのに、

誇らしいようにも感じた。

作り方も分からないし、

真似すらもできない。

それなのに、

どこから沸き上がったかも分からない、

おかしな自信ばかりが、

心を支配する。

鏡を見てしまえば、

なにも出来ない自分がいるだけ。

そこから、どうしても目を逸らしたくて、

上を向いて、

輝いている才能はないかと探す。